

令和7年度 本郷中学校
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、問題の解答は解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 二、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 三、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 四、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含まれます。
- 五、用具の貸し借りは禁止します。
- 六、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 七、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 八、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【二】 次の①～⑤の――線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 市長は市政を司る。
- ② マイキヨにいとまがない。
- ③ 朝礼でセイレッツする。
- ④ 用件をウケタマワる。
- ⑤ コップのふちがカける。

【二】 次の文章は、宮内泰介^{みやうちたいけい}『社会学をはじめ 複雑さを生きる技法』という文章の一部です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

① 今日の社会学^{注1}の軸をなすものは、フィールドワークです。フィールドワークという言葉は、どこか遠いところに行って調べる、というイメージがあるかもしれませんが、遠いか近いかは問題ではありません。どこかの土地、どこかの人びと、それが遠くても近くても、またどんな現場でも、その中で調べるのがフィールドワークです。意味が集積した現場の只中^{ただなか}で調べるのがフィールドワークです。

② フィールドワークは、インタビューや観察、資料探索などが含まれる複合的な調査技法ですが、その中心はインタビューにあると考えられますので、まずはそれから考えてみましょう。

③ インタビュー（聞き取り）というのはとてもおもしろい作業です。私自身、若いときから調査と言えばインタビューばかりを繰り返してきました。

④ 何かを聞きたくてインタビューするのですし、インタビューする前には「こういうことについてお聞きします」と伝えておくのがよいのですが、一方で、その予定のままにいかないのがインタビューのおもしろさであり、また、そこにインタビューという技法の核心もあります。

⑤ 質問項目をある程度決めてから始める、というのは、インタビューの前に何らかの意味把握、つまりは社会認識があるということです。その認識は、読んだ文献・資料からだったり、それまでに行った別のインタビューからだったり、そうしたもののから対話的に得られた暫定的な認識^{注2}です。その認識をもとにして、さらに認識を発展させるために「聞く」という作業に私たちは踏み込みます。しかし、事前の認識にもとづく質問項目がそのまま通用するわけではありません。こちらが聞くことと相手が話すことの間には必ずズレがあり、そのズレをお互いに修正しながら話が進みます。聞いている最中に認識の枠組みを相互に軌道修正しながらインタビューは進みます。それがつまり意味世界と意味世界がぶつかりあう、相互に影響しあうということであり、

つまりは「対話的に聞く」ということです。

⑥ 聞いている最中に認識の枠組みを軌道修正する、状況に応じた質問を新たに発する、ということは、私たちはインタビューの最中に「分析」を行っているのだということです。相手の発話を分析し、それによってこちらの認識を更新し、こちらの新たな発話を繰り返します。相手との対話から、「○○」という言い方をしたということは、○○への不満が小さくないことを示唆しているな。とすれば、こちらが想定していた○○の問題ではなく、A○○の問題かもしれない。それを確認するにはもう少し○○について話してもらうとよいだろう」などと分析をしながら聞く。それがインタビューです。「対話」的に進める、というのは、単にボールをお互い投げ返すことではなく、そのボールの質がどんどん変わっていくということです。

⑦ このように、意味世界同士のぶつかりあいが直に体験できるのがインタビューであり、分析を同時並行的に行いながら社会認識を更新していく作業がインタビューです。B、ただ相手が話すことをそのまま記録するのがインタビューではありません

ん。その意味で、インタビューは、社会学の社会認識プロセスそのものをぎゅつと凝縮したミクロな社会学的いとなみとも言えるでしょう。注3

⑧ というとても難しそうに聞こえますし、実際インタビューは思いのほか難しいのですが（数十年インタビューばかり行ってきた私はなおさらそう思います）、しかし一方で、今述べたような意味世界と意味世界とがぶつかりあいながら認識を更新していくという作業は、実は、私たちがふだんのコミュニケーションにおいて行っていることでもあります。私たちは人と話するとき、お互いの情報をただ交換しているわけではありませんし、お互いに独り言を言いあっているものでもありません。相手が言うこととこちらが言うことをぶつけ合いながら、認識を新たにしつつ、そこから何か（新たな行動指針や感情など）を生みだそうとするプロセスが私たちのふだんのコミュニケーションです。ですから、それは、社会学におけるインタビューとかなり近いのです。社会学の「ふつう」さがここにも現れています。

⑨ C、インタビューは一人の人を相手にすることが多く、そのとき、常に、とまでは言いませんが、多くの場合、その人のライフストーリー（生活史）を聞くことになります。ライフストーリーそのものを主題として聞く場合もありますし、何らか

のテーマ（たとえば独居老人がかかえている生活上の困難といったテーマ）について聞くときの横糸としてライフヒストリーを聞くことでもあります。家族、仕事、コミュニティ、病気、そういったさまざまなテーマにかかわる経験や思いを、その人が歩んできた道（ヒストリー）と合わせて豊かに語ってもらうとき、それはその人のライフ（生）のストーリー（語り）となります。ライフストーリーを聞くことは、社会学における認識プロセスの注⁴コアの一つです。

⑩ たとえば、私は、長崎のある地域の漁業史をライフヒストリーから描いてみたことがあります（宮内・金城達也^{きんじょうたつや}「ライフヒストリーから見るイワシ産業の地域史——長崎県雲仙市南串山町^{みなみくしやまちょう}の事例から」）。イワシ産業が基幹産業であるこの地域の社会史を描くにあたり、文献・資料だけでは十分なことがわかりませんでしたので、関係者一名に延べ一七回のインタビューを繰り返しました。いつ何隻^{せき}の船がどんな操業^{せうぎょう}をしていたのかといった「客観的」な情報はもちろんですが、むしろ、そのときどきで何が重要な出来事だと認識していたのか、何を考えてどう行動したのか、といった語り（ストーリー）を多く収集しました。

⑪ インタビューを繰り返す中で、個人の中の生きられた「歴史」²、個人の中の「社会」が対話的に浮かび上がってきます。一人名の方の話は、資料に書かれていたことも響き合いながら、何らかの「事実」³に行き着くと同時に、多様な認識も浮き彫りになってきます。複数の事実が存在するのです。それらとの対話から私の社会認識が進み、そこから、一つの作品として論文を書きました。論文では、イワシ産業にかかわった二人の人物（おもしろいことにこの二人は同級生でした）のライフストーリーを軸に地域漁業史を描きました。

【1】

⑫ その一人Tさん（一九三四年生まれ）は、戦前ユリの球根の買取りを行っていた問屋業の家の四男として生まれました。日本のユリは当時欧米で観賞用としてたいへん人気で、その球根は戦前日本の重要な輸出商品でした。戦後、Tさんの家は、商売替えをしてイワシ漁業に乗り出し、のちにTさんがそれを引き継ぎます。引き継いだ後Tさんはすぐに、乗組員との関係、加工業者との関係を革新し、また、機械化、規模拡大に乗り出します。「私は、どうすれば魚が獲れるかということの一段上に、どうすれば生き残れるかということを置いてきました。親が残した仕事がいちばんよい、というような状況を作り上げておかなければ

と考えました」とTさんは語ります。Tさんにとってのイワシ漁業は、家業継続戦略の色彩が強かったことがわかります。

- ⑬ 一方、Tさんの同級生Uさん（一九三三年生まれ）は、農家の生まれでしたが、中学卒業後いろいろな仕事を経て、親戚に誘われる形で小規模な煮干し加工場を始めます。同時に、提携先のイワシ漁業者の船にも乗務員として乗ります。そうした形がこの地域の漁業者と加工業者との典型的な関係でした。Uさんはそこでいったん農業を「捨てる」のですが、しばらくしたのち農業を兼業として再開します。農家出身でもともと資本もないUさんは、その時代時代の状況に合わせて生業の組み合わせを変えてきたのだということがわかります。

【2】

- ⑭ 二人のライフストーリーからは、この地域のイワシ産業の変遷の背景にある、漁業者と加工業者との切っても切れない関係（とその変化）、地域農業との「競合」関係、さらにはそれぞれの世帯の生業戦略の違いなどが浮かび上がってきました。

【3】

- ⑮ インタビュー調査をライフストーリーを軸として行うことの意義は、一人の個人というものが全体の中の一つの「点」なのではなく、社会的な「関係が複雑に集積する〈場〉」（佐藤健二『社会調査史のリテラシー』）なのということです。個人の「ライフ」そのものが探究すべき豊かなフィールドなのです。社会の構造の「コマ」として個人を見るのではなく、個人のストーリーの中に複雑な社会そのものを見ようとするのです。個人の中の重層性、複雑さ、あるいは個人の創発性^{注6}を見ることが自体が、そこから「社会」を経由せずとも、それだけで、現代社会学の目的である「人びとにとって大事だと思われることについて、データにもとづいて考える」となみになりえるのです。

【4】

- ⑯ 人類学者の松田素二^{まつだもとじ}は、このあたりを、他者との境界のはっきりした近代的な個人とは違う、「部族的セルフ」を見ることの重要性として議論しています（松田素二『日常人類学宣言！』）。松田はアフリカ研究者なので「部族的セルフ」という表現になっていますが、要は、近代的な個人とは違う「個人」、合理的な思考をする「主体的」な存在としての個人とは違う「個人」のあり

方を示す言葉です。この「部族的セルフ」は、複雑さや創発性をもった個人であり、しかし、他者から独立しておらず、社会とたえず相互作用している個人です。固定的な社会と、境界線のはっきりした固定的な個人とを、分けて考えるのではなく、また両者の固定的な相互作用としてみるのでもなく、それぞれが重層的で流動的なものとして見るのです。このような意味での「個人」に注目することは、社会学や人類学だけでなく、近年歴史学でも起きています（はせがわたくひこ長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』、まさはら榎原茂編『個人の語りがひらく歴史』）。

⑰ 「個人」の復権は意味の重層性の復権でもあります。多様で重層的な「個人」とダイナミックな社会が複雑に作用しあっているであり、それを私たちは個人に、ライフストーリーに見るのです。

⑱ このように、社会学において個人を扱うのは、経済学が個人の「合理的」な行動に注目するのと真逆で、個人の中の複雑さに注目するからです。だからこそその「ライフ」でありライフストーリーです。

※問題作成の都合上、文章中の小見出し等を省略し、問題文の形式段落に①～⑱の番号を付けています。

注1 社会学……人間の共同生活に関する現象や社会の組織・構成上の特徴などを研究する学問。

注2 暫定的な……一時的な。

注3 ミクロな……個別の具体的な事象に注目した。

注4 コア……最も大切な部分。

注5 操業……機械などを操作して、仕事を行うこと。

注6 創発性……多数の要素が集まったときに、個々の要素からは予測できなかった性質が現れること。

問一

A ☐ C ☐ に入る言葉を次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ しかし ウ むしろ エ かなり オ 完全に カ 決して

問二

次の一文は、問題文中から抜き出したものです。元の位置に戻すとすると、問題文中の【1】～【4】のどこに入れるのが適当ですか。番号で答えなさい。

なぜ個人に焦点を当てて、そのライフストーリーを聞くことが社会学において重要な位置を占めているのでしょうか。

問三

——線1「単にボールをお互い投げ返すことではなく、そのボールの質がどんどん変わっていく」とありますが、その結果インタビューをする人はどのようなことができるようになりますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般的で当たりさわりのない雑談から始めながらも、相手の話しぶりから自分の発問を反省して、その人にふさわしい発問をすることで、相手の人間性への理解を深めること。

イ 月並みな発問で満足することなく、相手に応じて臨機応変に発問内容を変えて、相手の社会への関わり方を明らかにすることによって、社会の変化の仕組みを理解すること。

ウ 事前に知り得た情報をもとに発問するだけではなく、想定外の相手の回答に応じて自身の考えを柔軟に改めつつ新しい発問を繰り返しながら、社会の見方を変えること。

エ フィールドワークをもとに用意した発問だけにとらわれず、予想外な回答であってもその意図を分析して、発問の方針を転換しながら、社会の調査方法を更新すること。

問四

——線2「何らかの『事実』に行き着く」とありますが、「事実」にかぎかつこ（「」）をつけたことで筆者はどのようなことを表そうとしたと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「歴史」や「社会」という言葉と同様に、インタビューの中で使われたものであること。

イ 誰にとつても同一のものではなく、人によって異なつたとらえ方をされるものであること。

ウ 「ライフストーリー」から見えるイワシ産業の地域史」という論文から引用されたものであること。

エ インタビューの内容だけではなく、資料の裏付けを得ながら新たな認識が成立すること。

問五

——線3「イワシ産業にかかわつた二人の人物（おもしろいことにこの二人は同級生でした）」のライフストーリーとありますが、この二人のライフストーリーから読み取れる、生業としてのイワシ漁業への関わり方の違いを六十字以上七十字以内で答えなさい。

問六 — 線4「個人のストーリーの中に複雑な社会そのものを見ようとする」とありますが、これはどういうことですか。

その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 個人が社会を構成する一作品のような単純な存在ではなく、環境や時代などからの刺激を受けた多面性のある複雑な存在であることを一人ひとりの話の中に見出そうとすること。

イ 様々な事情がからみ合って成り立っている社会からの影響によって、個人の思惑を超えたところでその人の立場や考え方が形成される経緯を一人ひとりの話の中に見出そうとすること。

ウ おのおの異質な価値観をもつ個人の活動がからみ合うことで、対立や調和を繰り返しながらも成立している多様な価値観をもった社会のあり方を一人ひとりの話の中に見出そうとすること。

エ 時代状況、個々の事情をかかえた人びとの関わり、それぞれの行為が意図とは無関係に与える世の中への影響により成立している社会のあり方を一人ひとりの話の中に見出そうとすること。

問七 この文章の構成・展開に関する説明として適当ではないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ①～⑦段落では、本論の話題である「インタビュー」を提示して、その内容を説明することで、それが社会学の中心的な調査である理由を解き明かしている。

イ ⑧段落では、前段落までで提起された話題について、人びとのふだんのコミュニケーションとの類似性に言及し、それが特別なものではないことを指摘している。

ウ ⑨～⑮段落では、「ライフストーリー」という話題を提起し、具体例をあげながら、それが「インタビュー」に代わる社会学の革新的な調査方法である理由を説明している。

エ ⑯～⑰段落では、「部族的セルフ」という概念を引用して、近代的な「個人」観とは異なる、他者や社会との境界があいまいな「個人」のありかたについて述べている。

【三】 次の文章【Ⅰ】【Ⅱ】は、夏川草介なつかわそうすけの小説『スピノザの診察室』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

【Ⅰ】

主人公の雄町哲郎おまちてつろうは、かつて大学病院で優秀な医師として将来を期待されていましたが、今は京都の原田病院はらだに勤めています。大学病院で哲郎の力量を高く評価していた先輩医師の花垣辰雄はながきたつおは、自分の弟子である南茉莉みなみまつりを研修の名目で原田病院に派遣しました。以下はこれに続く場面です。

「高齢の方が多いんですね……」

病棟を回りながら、戸惑い顔の南が口にしたのが、そんな言葉であつた。

処置がないというだけでも肩透かしであつたろうが、大腸カメラを見学したあとの回診の景色も予想外であつたらしい。病棟にはもちろん内視鏡治療注1でポリープや癌がんを切除して経過を見ている患者もいるが、寝たきりの高齢者ばかりの病室も少なくない。そういう部屋の空気は、病院というより介護施設に近い。

「お話ができる患者さんって、あまりいないんでしょうか？」

「内視鏡処置の患者を除くと、どうしても寝たきりか、認知症の方が多からね。さっきの部屋にいた矢野やのきくえさんが、しっかり会話できる数少ない患者さんかな」

はあ、と南は困惑を隠しきれない。

哲郎の受け持ち患者に限ったことではない。総合内科の秋鹿あきしかはもちろん、外科の鍋島なべしまや中将ちゅうじょうの受け持ちにも多くの高齢者がいる。そういった患者たちは、まともに会話が成り立つ者の方が少ない。九十歳の矢野きくえが、いつものように丁寧ていねいに挨拶あいさつをしてくれたが、これは例外なのである。

南は元来が真面目な性格なのだろう。哲郎の説明を細かくメモなどにとっていたが、九十歳の心不全治療について、若い消化

器内科医がどの程度興味を持ってくれたかというところ、甚だ心もとない。

「この患者さんは、何もしていいのでしょうか？」

南が足を止めたのは、小さな点滴を一本ぶらさげただけの、痩せた女性のベッドの前だ。

八十六歳の清水弥生は、寝たきりで会話もできず、食事も摂れていない患者である。一日250ミリリットルの点滴を一本行っているだけであるから、見た目はもう骨と皮に近い。

「身寄りもなくて、長いこと施設にいた人なんだ。先月から食べられなくなって入院になった。このまま看取るつもりだよ」

「食べられなければ胃瘻^{注2}を造ってあげればいいんじゃないでしょうか？」

いかにも率直な意見に、哲郎は首を左右に振る。

「施設に入るときに書いた、延命治療^{注3}は希望しないという意思表示の記録が残っていたんだ」

「胃瘻は延命治療なんですか？ 栄養管理をしてあげれば、まだまだ生きていけると思うんですが……」

その言葉のどこかに、¹かすかながら非難の響きが混じっていると感じたのは、哲郎の気の迷いであろうか。

「難しい問題だね」

切れ味の悪い返答になるのは、南の質問が、実際厄介な問題をはらんでいるからだ。

身寄りもなく、帰る家もなく、意思疎通もできない寝たきり患者に、胃瘻をつくってもとの施設に送り返すことが、正しいことか間違っていることか、明確な答えは示せない。

その微妙な部分を、短い時間で説明することは困難であったが、困難な部分を差し引いても、哲郎の返答は、説得力のあるものとは言えなかった。

「まあ日本は世界一の高齢国家だからね。医療の最前線の病院はだいたいこんなものだよ。ここだけが例外じゃない」
つとめて軽く応じたために、かえって軽薄に聞こえたかもしれない。

結局、十数名の高齢患者の回診をして、その日の業務は終了となったのである。

【Ⅱ】

以前、長年の深酒のため肝臓を病んで原田病院に緊急搬送された辻新次郎は、哲郎の処置で一命をとりとめました。働くこともできず治療費も払えなかったため、退院した後は治療を受けずにいました。ある日、警察から辻の死を知らされ、彼の検死を依頼された哲郎は南と出かけ、旧知の浜福巡査と共に辻の検死を行い、部屋を出ました。以下はこれに続く場面です。

額に手をかざした哲郎の胸には、初めて辻が運ばれてきたときの救急外来の情景が浮かんでいた。ストレッチャーの上で『お金ないで。ええんか』と辻が言っていたのは、ほんの三か月前のことなのだ。そのあと再度吐血で運ばれてきたもののなんとか救命してようやく退院し、先週一度、外来を挟んだところであった。ずいぶん急ぎ足で通り過ぎて行ったものだと思う。

「このままにしといてくれへんか、先生」

苦笑とともにそう言っていた辻の姿が思い出された。と同時に、哲郎の胸にささやかな疑念が去来する。

——辻は敢えて、救急車を呼ばなかったのではないか……。

突然吐血をすれば、普通は何を措いてもすぐに救急車を呼ぶであろう。しかしポテトチップスの袋の横には、携帯電話が手も付けられずに置いてあった。手を伸ばした様子もなかった。なにより、大きな血液の跡の上に、辻が仰向けに寝ていたことが引つかかっていた。大量吐血の海の中で、横倒しに倒れた辻が、一度ゆっくりと寝返りを打って自分で仰向けになったようにも見えるのだ。一気に血圧がさがって意識がなくなった可能性もあるが、そうでなかった可能性も浮かんでくるのは、辻の横顔があまりに穏やかであったからだろう。

今となつては確認しようもない話である。

小さく息を吐いてアパートの廊下を歩き出そうとしたところで、出てきたばかりのドアが開き、浜福が顔をのぞかせた。

「雄町先生、どうも、先生にお見せした方がいいかもしれないものが出てきましたね」

そう言つて外に出てきた浜福が、片手で埃のついた袖口を払いながら、黄ばんだ免許証を差し出した。

「私に？」

「なんともわかりませんが……」

老練の巡査が珍しく言葉を濁している。

哲郎は軽く眉を寄せて、免許証を受け取った。辻が持ち歩いていた期限切れの免許証だ。

髭も剃つてさっぱりとした装いの昔の辻の写真は、血まみれで運ばれてきた本人とのギャップが大きかっただけに、よく覚えている。

「財布の中に入っていたんです。たいした現金も入っていない札入れに。見逃すところでしたが、裏の走り書きは、もしかしたら先生宛やないかと思うて……」

浜福に促されて免許証を裏返した哲郎は、一瞬遅れて、息を吞んでいた。

裏の備考欄に、小さく書かれた住所変更の記録は、以前に見たときと同じだ。同じでなかったのは、その下に、明らかにあとから追加された大きな文字が並んでいることであつた。

『おおきに 先生』

たった六文字であつた。

たった六文字が、震えるような筆致で記されていた。使い古されたボールペンの文字であろう。ところどころが擦れ、途切れかけた部分さえあつたが、読み違えようのない六文字が、狭い罫線からはみ出しながら、精一杯の大きさに記されていた。

『おおきに、先生』

短いメッセージはふいに音となって、哲郎の耳にこだました。

辻が、白い机の向こうで不器用な微笑を浮かべていた。

それから机に手について、深々と頭を下げていた。

先生のところやったら、俺は安心して逝^いけそうな気がするんですわ
声だけが降ってくる。

筆跡は、お世辞にも綺麗^{きれ}とは言い難い。しかしそこに躍る大きな文字は、辻本人のように苦みを含みつつ端然と笑っていた。
『おおきに 先生』

² — そんなに急いで逝くこともないだろうに……。

なかば強引に苦笑しようとしたところで、ふいに六文字が滲^{にじ}んで見えて、哲郎はそっと目を閉じていた。
こういう感覚は久しぶりだ……。

哲郎は思う。

医師として、これまでも多くの人を看取ってきた。その中で残された家族から感謝の言葉を告げられたことは少なくない。けれども、亡くなった人から受け取ったのは初めてであった。

「手持ちの財布の中身が全部です」と、辻は言っていた。免許証の裏におよその所持金でも書いておくと笑っていたが、金額ではなく六文字だけを追加したのは、こんな事態まで想定していたということなのだろうか。運が良ければ届くだろうが、気づかなければ、それはそれでかまわない。 A 辻らしい、そんな態度まで伝わってくる。

(中略)

辻の自宅から病院までの帰路を、哲郎と南は言葉もなく歩いていた。

日差しは中天を過ぎ、かすかな風が流れている。

ときどき車やスクーターが行き過ぎる程度の、比較的静かな通りを、白衣を小脇^{わき}に抱^かえた哲郎はゆつくりと歩を進めていた。

「すまないね、南先生」

哲郎が短く告げた。

「初めての検死だったろうに、指導も何もしていなかった」

「大丈夫です」

答えた南は、すぐに続けた。

「連れて行って頂けただけでも勉強になりました。先生のおかげです」

「感謝されるようなことは何もしてないよ。辻さんが思わぬ策士^{さくし}で、ひどく驚かされた。最初に来たときも唐突だったけど、去っていくときもいぶん唐突だったね」

はい、と小さくうなずきながら、南はそれに続けるべき様々な思いを飲みこんで沈黙した。社交辞令で感謝を口にしたのではない。けれどもそれは、言葉を重ねることでは伝わるものではないだろう。

医師になって四年あまり。そのほとんどを大学病院で過ごしてきた南にとって、哲郎を取り巻く医療の世界は、驚くほど異質であった。異質³ではあるが、異様ではなかった。のみならず、慌ただしい日々の底に、不思議な静けさを有していた。その静寂のただ中で、ひとり佇み^{たたず}、思索^{しそく}を続けている指導医の姿が、今の南の目にははつきりと見えている。

「これで良かったのか……、とは私は考えないようにしているんだ」

先を歩く哲郎が続けた。

「これで良かったのだと、自信をもって言ってやりたいが、それほど医療というものは甘くはないし、私の心も強くない。だから、私が言えることはいつもひとつだけなんだよ」

足を止めた哲郎は、高く澄んだ空を見上げた。

「本当にお疲れ様でした」

短い言葉が、空に昇って消えていった。

哲郎は、日差しに目を細めたまま動かない。

夏と秋の溶け合った季節の狭間^{はざま}の風が、ふわりと二人の間を過ぎていく。どこかでかすかに、自転車のベルの音が響き、遠ざ

かつていった。

「私はね、南先生」

ふいに哲郎が口を開いた。

「医療というものに、たいした期待も希望も持っていないんだ」

唐突な言葉が路地に響く。

南はたじろがない。ただ黙って、耳を澄ます。

「医者があることを言っではいけないのかもしれないが、医療の力なんて、本当にわずかなものだと思っている。人間はどうしようもなく儂い生き物で、世界はどこまでも無慈悲で冷酷だ。そのことを、私は妹を看取ったときにいやというほど思い知らされた」

わずかに口をつぐんだ哲郎は、「けれども」と続ける。

「だからといって、無力感にとらわれてもいけない。それを教えてくれたのも妹だ。世界にはどうにもならないことが山のようにあふれているけれど、それでもできることはあるんだってね」

哲郎の淡々とした声が、少しずつ力を帯びていく。

「人は無力な存在だから、互いに手を取り合わない」と、B 無慈悲な世界に飲み込まれてしまう。手を取り合っても、世界

を変えられるわけではないけれど、少しだけ景色は変わる。真つ暗な闇の中つかの間、小さな明かりがともるんだ。その明かりは、きつと同じように暗闇で震えている誰かを勇気づけてくれる。そんな風にして生み出されたささやかな勇気と安心のことを、人は『幸せ』と呼ぶんじゃないだろうか」

^{注4} いつか車の中で南が聞いた、あの言葉が聞こえていた。

指導医は、小柄な後輩に静かな目を向けた。

「間違えてはいけないよ、先生。医療がどれほど進歩しても、人間が強くなるわけじゃない。技術には、人の哀しみを克服する

力はない。勇気や安心を、薬局で処方できるようになるわけでもない。そんなものを夢見ている間に、手元にあったはずの幸せはあつというまに世界に吞まれて消えていつてしまう。私たちにできることは、もっと別のことなんだ。うまくは言えないけれど、きつとそれは……」

哲郎は、また空を見上げる。

⁴注5がどう

「暗闇で凍える隣人に、外套をかけてあげることなんだよ」

不思議な言葉であった。

立ち尽くしたまま、ゆつたりと胸の内に溢^{あふ}れてくる思いを、南は口に出すことができなかった。

C

言葉にできるような

ものではなかった。ただ、風の音と胸の鼓動だけが聞こえていた。

おもむろに哲郎は、白いものの交じった髪を掻^かき回した。

「すまないね。どうも小難しい話をしてしまった」

その頬に苦笑が浮かんでいた。

「これから医学を学んでいく若い先生に話すような内容じゃなかった。どういうわけか、君が相手だと無闇と話しすぎてしまうらしい」

南は大きく首を左右に振っていた。

哲郎の語る言葉をすべて理解するには、南はまだまだ知らないことが多いのだと思う。けれども、とても大切なことを語っているということだけは確信をもって言える。

哲郎の立っている場所は、スポットライトの当たる華やかな舞台の上ではないけれど、その足元は、いつも柔らかな光に包まれているように見える。そして哲郎の歩いて行つたあとには点々と明かりが灯り、その光は別の誰かを導き、また新しい明かりを生み出していくに違いない。辻が最期に、温かな言葉を残していったように。

ふいに二人のそばを、郵便配達の赤いバイクが通り過ぎていった。

南は、哲郎の視線を追って空を見上げた。

十月の古都にはまだまだ夏が居座っているが、いつになく青く澄み切った空には秋の気配が垣間見える。

あとひと月もすれば、東山も北山も稜線から順に秋色に染まって来るだろう。錦の彩りはやがて市中に舞い降り、高台寺の境内も、渡月橋の袂も、哲学の道も、ことごとくが厳しい季節を前にした最後の彩りを見せてくれる。

美しい季節がやってくる。

「先生」

ふいに南が口を開いた。

5 「私、もつと先生のもとで学びたいと思います」

よく通る声が、小道に響く。

「だから、これからもよろしくお願いします」

南は小道の真ん中で、深く頭を下げていた。

哲郎は律儀な後輩を振り返り、小さく笑ってからうなずいた。

それからまた空を見上げる。

「もう秋だね」

そんな他愛もない言葉と共に、再び哲郎は歩き出した。

東山の稜線に、刷毛で掃いたような霞雲が、ゆつくりと流れていた。

※問題作成の都合上、文章を一部省略しています。

注1 内視鏡……先端にカメラを内蔵し、体内に入れて検査や治療・処置を行う医療機器。

注2 胃瘻……口から食べ物を摂取できない患者に対して、お腹に開けた穴にチューブを通し、直接、胃に栄養を送り込む方法。

注3 延命治療……心身の衰弱や重度の病気などで生命の維持が難しい人に対して、措置を施して一時的に命をつなぐ医療行為。

注4 いつか車の中で南が聞いた、あの言葉……以前、哲郎は、「治らない病気の人や、余命が限られている人も幸せに過ごすことができるはずだ」という意味のことを南に話したことがあった。

注5 外套……防寒のためのマント、コートなど。

問一

~~~~線 a ~ c の言葉について、それぞれの問題文中における意味として最も適当なものを、後のア ~ エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 心もとない

ア 感心しない

イ 腹立たしい

ウ 不安だ

エ 物足りない

b たじろがない

ア 動揺しない

イ 声を出さない

ウ 感情を出さない

エ 反論しない

c おもむろに

ア ふいに

イ ためらいつつ

ウ 力強く

エ ゆっくりと

問二

A ~ C

に当てはまる言葉を次のア ~ カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しばらく

イ たちまち

ウ ひときわ

エ いかにも

オ もとより

カ おりしも

問三

——線1「かすかながら非難の響きが混じっていると感じた」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 余命いくばくもない患者に対する治療をすっかりあきらめていることについて、南がひどく怒っているように哲郎には思えたということ。

イ 延命治療を施すべきだと強く主張する南が、無駄なことをするべきではないという哲郎の言葉を責めているように哲郎には思えたということ。

ウ 延命治療を希望しない患者に、最後まで生きることをあきらめさせてはならないと南が説得しているように哲郎には思えたということ。

エ 有効な処置を行えばまだ生きられるのに、高齢者の治療に前向きでないのではないかと南に責められているように哲郎には思えたということ。

問四

——線2「なかば強引に苦笑しようとしたところで、ふいに六文字が滲んで見えて」とありますが、この時の辻に対する哲郎の心情を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 苦しむ辻のためにしてやれることはもつといういろいろあったはずなのに、医者としての努力を怠ってしまったことを後悔し、苦々しく思っている。

イ もつと早くにきちんと治療してさえいれば、病気を完全に治すこともできたのに、なぜそうしなかったのかと辻を責める気持ちに駆られている。

ウ 簡潔ながら辻らしい感謝の言葉を目にして、笑うことで悲しみを紛らわせようとしたが、彼の死を悔やむ気持ちがにわかにこみ上げてきている。

エ 貧しい暮らしの中でも幸せに生きようと努力し、やり残したことが多いまま一生を終えることになった辻の無念さと悲しみに思いを馳せている。

問五

——線3「異質ではあるが、異様ではなかった」とありますが、これは南がどう感じたということですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 患者の意思を優先して時には看取することも良しとする哲郎の姿勢と、救命を最優先に医師の判断で最善と思われる治療を行う大学病院の姿勢とは、性質の異なるものであるが、医療に真剣に向き合う姿勢はどちらも変わらないということ。

イ 患者の意思を優先して治療方法を様々に変えていくとする哲郎の姿勢と、医師の診断を優先して最先端技術을駆使する大学病院の姿勢とは、性質の異なるものであるが、患者をできるだけ長く生かしたいという姿勢に変わりはなくということ。

ウ 出世や名誉などには目もくれない哲郎のような医師の多い病院と、医師どうしの権力闘争が絶えない大学病院とは、医療現場として性質の異なるものではあるが、同じ医師として患者のために力を尽くそうという姿勢には変わりがないということ。

エ 患者の意向ばかり気にして時には死なせてしまうような哲郎の病院と、優秀な医師を取りそろえて高度な医療を提供する大学病院とは性質の異なるものであるが、最終的には医師が責任を持って決断しなければならないという姿勢は変わらないということ。

問六

——線4「暗闇で凍える隣人に、外套をかけてあげること」とありますが、これはどのようなことを言おうとしているのですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 医療の進歩には限界があるが、それでも患者の幸せを願うことを第一に、希望を捨てずに研究を進めるべきだということ。

イ 医療は万能ではないから、病氣や死を前にして不安な患者のそばにいて寄り添ってあげることしかできないということ。

ウ 医療の進歩に加えて、医師の技量を上達させることで、弱い人間の心の支えになることくらいならできるとのこと。

エ 医療技術は患者にとって死を前にして無力であるが、治療によって患者に長く生きてもらうことが医師の役目だということ。

問七

——線5「私、もっと先生のもとで学びたいと思います」とありますが、このように述べる南の哲郎に対する気持ちの変化について、問題文全体を踏まえて七十字以上八十字以内で説明しなさい。





